

## 「着」と〈テイル〉の対照研究 (五)

時 衛国

外国語教育講座

### A Contrastive Study of “Verb + Zhe” and “Verb + Teiru” (V)

Weiguo SHI

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 要約

本研究は中国語と日本語における存在表現について、中国語の「着」と日本語の〈テイル〉を取り上げて比較考察したものである。事象の存在を描写することができるという点では、二語は大体共通しているが、しかし、受動表現にも用いることができるかどうか、また、場所語による制約を受けるかどうかという点では異なっている。

「着」は空間範囲を表わす語句に助けを借りて事象の空間的存在を表わすが、存在表現における存在については、空間範囲の設定が前提として必要になり、感覚的、視覚的に存在する事象を表現することができる。〈テイル〉はそのままで事象の存在を描写することができるので、空間範囲を表わす語句に依存することはない。また、受動表現においても存在表現の一翼を担う機能が付与されているが、受動表現に用いられるという一方で、動的状態なのか静的状態なのかははっきり規定されにくい一面を持っている。

キーワード：存在表現・静的状態・動的状態・持続・描写

#### 1. はじめに

言語類型論から考えれば、中国語はSVOタイプの言語として分類され、日本語はSOVタイプの言語として分類されていることはよく知られている通りである。両言語は語順が異なっているが、「場所語 + V(動詞)「着」+ 目的語」と〈場所語 + 主語が + Vテイル〉のように、ある場所に人間や物が存在することを表わすことができるという点では共通している。本研究では、これらの存在を表わす表現を存在表現と呼ぶこととする(以下同じ)。

中国語の「着」と日本語の〈テイル〉<sup>1)</sup>はいずれも、存在表現に用いることができる。たとえば、

- (1) 黒板上写着字。(黒板に字が書いてある)<sup>2)</sup>
- (2) 黒板に字が書いてある。
- (3) \*黒板上字被写着。(「黒板に字が書かれている」の意)
- (4) 黒板に字が書かれている。

(1)(2)のように存在表現における静的状態を捉えることができるという点では、両語は共通しているが、

しかし、「着」は(3)のように受動表現における静的状態を表現することができないという点では、〈テイル〉と違っていると考えられる。

「着」と〈テイル〉〈テアル〉は、存在表現においてどのように運動に関わり、どのような共通点と相違点を持っているのか、そして、文法的にはどのような特徴を持っているのか。両語の意味機能を明らかにするには、対照研究の角度から考察する必要があると考えている。本研究は、存在表現における「着」と〈テイル〉の意味機能と文法的特徴について、これまでの先行研究を踏まえながら考察し、両者の共通点と相違点を究明することとする。

#### 2. 先行研究

「着」については、李临定1985・1986、陈平1988、徐丹1992、戴耀晶1994・1997、菅谷有子1996、刘一之2001、吴卸耀2006、王学群2007、高桥弥守彦2007、丸尾誠2007、张黎2012などの研究<sup>3)</sup>があるが、しかし、「主語 + V + 着 + 目的語」という構造についてはあまり述べられていない。一方、存在を表わす「場所語 + V +

着+目的語」という構造については、研究の蓄積がある<sup>4)</sup>。しかし、これまでの先行研究では、存在を表わす「場所語+V+着+目的語」という構造と能動を表わす「主語+場所語+V+着+目的語」という表現の意味の連続性については言及されていない<sup>5)</sup>。また、呂叔湘主編1984では中国語の存在表現について、A(屋子里有人(部屋の中に誰かいる))とB(门口站着一位红军战士(入り口のところに一人の赤軍の兵士が立っている))とC(墙上挂着一幅世界地图(壁に世界の地図が一枚掛かっている))の三種類に分類し、説明を行なっている。この研究は存在表現を理解するのに役立つものであるが、存在表現に伴う文法的な制限についても説明する必要がある。

中国語では存在表現については多くの研究者によって取り上げられている。例えば、李臨定1985・1986、吳卸耀2006らは詳しく追求しているが、ただ「着」と存在表現との関係についてはあまり取り上げられていなかった。

〈テイル〉については奥田靖雄1978、寺村秀夫1984、益岡隆志1987、工藤真由美1995、中島孝幸1999などがある。これらの研究は主として「主語+目的語+V+テイル」という能動表現について考察しており、参考になるものであるが、「場所語+対象語+V+受動形+テイル」と「場所語+対象語+V+テアル」という構造についてはあまり述べられていない。「場所語+対象語+V+テアル」という構造については、寺村秀夫1984、益岡隆志1987、杉村泰1996、原沢伊都夫2002、飯嶋美知子2004、齋藤茂2007・2012、李京保2007、吉川妙子2012などの研究がある。寺村秀夫1984はこの文型について、眼前の状態を描写する文型と現在の状況を述べる文型とに分けて説明している。運動と存在を表わす表現形式は多種多様であり、各表現形式の意味機能を究明するには、相互の関連性を視野に入れて考察することが重要ではないかと思われる。ところが、従来の研究では、「主語+目的語+Vテイル」と「場所語+対象語+V受動形+テイル」と「場所語+対象語+Vテアル」との三種類の文型については、相互の関連性・意味の連続性・表現の論理性などの視点からも考察すべきなのではないかと考えている。

日本語では、存在表現は固定した概念として認められているとは現段階においてはまだ言えないようである。しかし、「場所語+主格+Vテイル」という表現の場合、所定の場所にある状態は存在することを表わすから、存在表現と考えるべきである。

### 3. 本研究の課題

本研究は、「着」と〈テイル〉が存在表現において、それぞれがどのように動的状態と静的状態を表わし、それぞれの表現形式とどのような関連を持っているのか

について考察する。その目的は存在表現の実態と両言語の特色を究明することにある。

運動には始動・持続・終結という三局面を含む過程があり、最後の局面いわゆる終結の局面に来ると、結果が生まれ、静的状態として存在することになる。運動は動的状態を表わすのに対し、結果は静的状態を表わす。ただ結果は運動による結果と単純な結果(状態)がある。運動による結果は、運動と関連があり、結果になる直前の段階もその直後の段階も想定することができる。しかし、単純な結果(状態)は運動との関連は想定することができず、ただ一種の状態として存在しているのみである。

中日両言語にはいずれも能動表現、受動表現と存在表現を持っている。「着」と〈テイル〉は能動表現に用いられる場合は、「(主語+)場所語+V+着+目的語(往墙上挂着地图)」「(主語+)場所語+目的語+V+テイル(壁に地図を掛けている)」という文型によって表現されるが、受動表現に用いられる場合は、「場所語+V(他動詞)受動形+テイル(壁に地図が掛けられている)」という文型によって表現される。後述するように、中国語の「着」はこの受動表現には用いることができない。そして、存在表現に用いられる場合は、「場所語+V+着+対象語(墙上挂着地图)」という文型によって表現されることになる。本研究では、〈テイル〉と〈テアル〉との違いを追究するため、「場所語+対象語+V+テアル(壁に地図が掛けてある)」という構造も適宜取り上げる。一方、日本語の「場所語+対象語+V+テアル(壁に地図が掛けてある)」という文型に相当すると見られる表現は、中国語では存在表現として「場所語+V+着+目的語(墙上挂着地图)」という文型によって表現されることになる。

本研究は、中国語と日本語における存在表現については、A運動の結果を表わす存在表現とB単純な状態を表わす存在表現に分類し、それぞれの表現形式と二者の共通点と相違点について考察する。

A運動の結果を表わす存在表現形式は、さらに細かく分類すると、①運動の結果を表わす能動表現と②運動の結果を表わす受動表現に分けることができる。①は「場所語+V着+目的語(墙上挂着地图)」「場所語+V(他動詞)+テアル」(壁に地図が掛けてある)」という文型、②は「場所語+V(他動詞)受動形+テイル(壁に地図が掛けられている)」などの文型があり、該当語として「挂/掛ける」「貼/貼る」<sup>6)</sup>のような他動詞が挙げられる。「挂/掛ける」「貼/貼る」などの動詞は、能動表現にも受動表現にも用いられる。

一方、B単純な状態を表わす存在表現形式は、「場所語+V着+目的語(台上坐着主席团)」「場所語+V(自動詞)+テイル(演壇の席上に主席団のメンバーが着席している)」などの文型があり、「站/立つ」「坐/座る」<sup>7)</sup>のような自動詞が該当語として用いられる。そして、「站/

立つ」「坐/座る」などの動詞は、能動表現に用いられることが多い。

AとBは、いずれも存在表現形式として静的状態を描写することができるという点では共通しているが、受動形を取ることができるかどうか、該当動詞が〈テアル〉と共起できるかどうかという点では異なっている。

## 4. 分析

### 4.1. 能動表現の場合

両語は存在表現に用いられ、静的状態として持続している物事の場面を描写することができるという点では共通しているが、複数の段階に位置する静的状態の持続を表わすことができるかどうかという点については、「着」は〈テイル〉と違っている。

- (5) 墙上挂着地图。(壁に地図が掛けてある)
- (6) a壁に地図が掛けてある。  
b壁に地図が掛かっている。
- (7) 黑板上写着字。(黑板に字が書いてある)
- (8) 黑板に字が書いてある。

「着」は「場所語 + V + 着 + 目的語」という構造の存在表現に用いられ、動的状態実現後の結果としての静的状態の持続を表わす。(5)(7)は、壁と黑板という場所にそれぞれ地図と字が存在していることを表わす。場所語は主語の位置に来て、ある場所に何かが存在しているという意味を鮮明に示し、存在表現の一形式として静的状態の持続を端的に強調することができる。この構造の特徴は、動作主が登場するのではなく、場所語が主語として存在の場所を明確に示すという点である。

「往墙上挂着地图(壁に地図を掛けている)」のように、動作主が主語に立つ能動表現の場合は、動作主による動的状態の持続を視野に入れ、その状態の持続の最中に重点を置き、能動的に行動しているということを表わすのに対し、存在表現の場合は、静的状態の持続存在に着目し、ある場所に静的状態が存在しているということを表わす。ただ、二者には密接な関係が存在し、意味の連続性があるものと考えられる。

動作過程を持つ前者は、始動・持続・終結という運動過程における持続の局面にある動的状態を能動的に捉え、運動過程を離れていない段階にあることを表わす。それに対し、動作過程を持たない後者は前者の運動過程を離れた段階に位置する静的状態を受動的に表現し、動的状態による結果としての静的状態がどこかに現れているということを示し、その前の段階に位置する動的状態を想定している<sup>8)</sup>。もし前者を動的状態というならば、後者を静的状態と呼ぶべきである。動

的状态は「挂(掛ける)」「写(書く)」という動作・行為を表わすのに対し、静的状態はその動作行為の結果を示している。たとえば、(5)は誰かが地図を壁に掛けているという段階、そして、(7)は誰かが字を黑板に書いているという段階が容易に想定されるのである。したがって、前者と後者は密接な関係にあり、互いに各自の段階が想定できるものと思われる。

呂叔湘主编1984は、中国語の存在文(本研究における存在表現に相当。以下同じ)について「A(屋子里有人(部屋の中に誰がいる))は単純な存在を表わしているが、B(门口站着一位红军战士(入り口のところに一人の赤軍の兵士が立っている))とC(墙上挂着一幅世界地图(壁に世界の地図が一枚掛かっている))は何かの形で存在することを表わしている。B類における名詞は行為者のこと、C類における名詞は受動者のことを表わす。そしてB類とC類における動詞は後によく「着」が付けられるが、動作の進行を表わすのではなく、動作による状態を表わすのである。動詞の後の名詞は普通特定されない事象を表わすので、その前には「一个(一つ/一人)」「几个(幾つ/何人)」などの語句がよく来る。この名詞は特定される事象を表わす場合(たとえば専有名詞)にも、その前に「[一]个([一]個/人)」などの字を付けなくてはならない」と記述している<sup>9)</sup>。

A類は述べた通り、単純な存在を表わす表現形式だが、B類とC類は動作実現後の結果としての静的状態の持続存在を描写する表現形式であり、いずれも「着」を付けることができる。しかし、次のような三つの言語事実については指摘されていない。

第一に、B類とC類における名詞の位置とその名詞の性質については言及されていない。B類は「着」は自動詞として用いられ、「×门口坐着东西(「入り口のところに物が置かれている」の意)」のように、動詞の後には人間や動物などを表わす名詞しか来ないのに対し、C類は「着」は他動詞として用いられて、事象や対象物などを表わす名詞が多用されている。また、「摇篮里放着婴儿(揺り籠に赤ちゃんが寝かされている)」のように人間や動物などを表わす名詞にも用いられる。

第二に、B類の場合の動詞は自動詞であり、ある姿勢を表わすだけに限られていて、「×他站着门口(「彼は入り口のところに立っている」の意)」のように「着」と共起する場合には能動表現には用いることができない。しかし、C類は動的状態を表わす能動表現にも静的状態を表わす存在表現にも用いることができる。

第三に、呂叔湘主编1984は、「動詞の後の名詞の前には「一个(一つ/一人)」「几个(幾つ/何人)」などの語句がよく来る。この名詞は制限される事象を表わす場合(たとえば専有名詞)にも、その前に「[一]个([一]個/人)」などの字を付けなくてはならない」と述べているが、実際には「台上坐着主席团(演壇上に出席団のメンバーが着席している)」「脖子上围着围巾(首にマフラーが

巻かれている)」などのように、数量を表わす語句がなくとも存在表現として成立する。

一方、徐丹1992では「着1」は二つに分けられ、「吃着飯(ご飯を食べている)/刮着胡子(髭を剃っている)/种着花(花を栽培している)」などは、動作の持続(本研究でいう動的状態の持続に相当)を表わすものとして「着1」、そして、「挂着画(絵が掛けてある)/穿着大衣(オーバーが身に付いている)/种着花(花が栽培されている)」などは、動作の結果としての状態の持続(本研究でいう静的状態の持続に相当)を表わすものとして「着2」と呼び、「着1」を動態、「着2」を静態と見なしている。ところが、「着2」における「挂(掛ける)/穿(着る)」も「种(植える)」と同じように「着1」の用法を持っている。したがって、氏の分類は再検討する必要があるように思う。

氏はまた、「着1」は「\*他喝着一杯茶(彼はお茶を一杯飲んでいる)」のように数量詞と共起することができないのに対し、「着2」は「桌上放着一杯茶(テーブルにはお茶が一杯置いてある)」のように数量詞と共起することができる」と述べている。しかし、実際には氏の研究で×となっているが、「他喝着一杯茶(彼はお茶を一杯飲んでいる)」のように、数量詞と共起することができる。氏の分類に従って説明すると、「数量詞+名詞(一杯茶/一個人)」という構造の場合は、人間や物の数を表わすので、「着1」も「着2」も共起できるが、動作の回数や時間を表わす数量詞が来る場合、動的状態を表わす「着1」だけと共起し、「着2」は共起することができないということである。「着」を二つに分ける場合は、その分類の基準を明確にしないといけないと筆者は考えている(P 457, 458)。

徐氏が「また、存在文では「V着」が否定形式を取る時、「V在」より多く制限されていて、人々が否定形式を使うとき、「V在」を使うことが多い」とし、「V在」は「字没写在黑板上(字は黑板に書かれていない)」「花没种在院儿里(花は庭に栽培されていない)」「梯子没靠在墙角(はしごは塀の隅に掛かっていない)」のように自然な文として挙げられているが、「V着」は、「黑板上没写着字(黑板には字が書いてない)」「院儿里没种花(庭には花が栽培してない)」「墙角没靠着梯子(塀の隅にははしごが掛けてない)」のように、不自然な文として挙げられている。しかし、この観点は適切だとは言えない。「黑板上写着字(黑板には字が書いてある)」の否定形式としては、「黑板上没写字(黑板に字が書かれていない)」と「黑板上没写着字(黑板に字が書かれていない)」の両方が可能であるので、自然な文として認めるべきである(P 459)。

戴耀晶1994では、「着」は動的状態と静的状態のいずれも表わすことができるので、二重性があり、この二重性は動詞自体の意味と関わっていると述べられている。そして、「转着(回っている)」「唱着(歌っている)」のように動的意味を表わす動詞は、「着」を付けると動的状態、そして「红着(頬を)高潮させている)」「存在着(存

在している)」のように静的意味を表わす動詞は、「着」を付けると静的意味を表わすことになるとし、動的状態と静的状態に共に用いられる動詞として「挂(掛ける)」「穿(着る・穿く)」「套((外側に)着ける)」などが挙げられている。

戴氏のこの指摘は適切だが、ただ、「挂(掛ける)」「穿(着る・穿く)」などの動詞は存在表現に用いられる場合、動的状態ではなく、静的状態を表わすのだという点についても述べるべきだと考える。なぜなら、存在表現は静的状態の存在を表わすので、「挂(掛ける)」「穿(着る)」などの動詞の静的状態の意味しか認められないからである。そして能動表現の場合は前述の通り、その動的状態を表わすことになるものと思われる。

日本語では、「掛ける」「書く」などの動詞は、後述する受動表現の他、「場所語<sup>10)</sup>(二)+対象語(ガ)+V(自動詞)+テイル」「場所語(二)+対象語(ガ)+V(他動詞)+テアル」という存在表現にも用いられ、静的状態の持続を表わすことができる。「テアル」は「テイル」の能動表現による結果を表わしている。

例文(6)のbと(8)における「テアル」は、「場所語(二)+対象語(ガ)+V+テアル」の構造で、静的状態が持続し、存在していることを示している。この場合は、存在の場所を表わす「壁」「黑板」が文の頭に来ているため、場所が強調されていると考えられる。一方、対象物(「地図」「字」)を強調する場合は、「地図が壁に掛けてある」「字が黑板に書いてある」のように対象物を文の頭に置くことができる。そして、他の物についても視野に入れている中で、「地図」「字」はどのように処置しているのかを説明する場合は、「地図は壁に掛けてある」「字は黑板に書いてある」のように、ハ格を取ることもできる。この点について、「地図在墙上挂着(地図が壁に掛けてある)」「字在黑板上写着(字が黑板に書いてある)」「地图是在墙上挂着(地図は壁に掛けてある)」「字是在黑板上写着(字は黑板に書いてある)」のように、「着」は「テアル」に対応しているものと考えられる。

「テアル」について、多くの研究がなされている。寺村秀夫1984は「テアル」の構文を次の二種類に分類している<sup>11)</sup>。

眼前の状態を描写する場合

(85) 壁ニ絵ガカケテアル

現在の状況を述べる場合

(87) 先方ニハモウソノコトヲ話シテアリマス

氏は「眼前の状態を描写する場合」については、「ある目的のための準備という意味合いは、アル場合もあるが、ない場合のほうが多いようである」と述べている。また、「現在の状況を述べる場合」については、「その処置が、あることに対する準備という意図とするも

のであるという意味合いが強くなる」(P 151)と述べている。この論述は適切ではあるが、しかし、二者の有機的な構造について、相互に関連しているという点についてはあまり述べられていない。

益岡隆志1987は、形式的な側面と統語論の観点から〈テアル〉を、「A型((対象)ガ～テアル(動作主は抑制される))」と「B型(動作主)ガ(対象)ヲ～テアル」の二種類に分類し、全体共通する意味として意志的行為の結果に重点が置かれる「結果相」の表現とし、さらに下位分類も行なっている。

ところが、従来の研究ではこの二種類(益岡1987では下位分類として四種類)の表現形式の相互関連については論理的に説明されているとは言えない。「(動作主)ガ)+(対象)ヲ～Vテアル」は、動作主または話者による制御可能な動的状態の達成を表わすので、行為描写文(益岡1987参照)であるのに対し、「(対象)ガ+Vテアル」は前者の結果としての静的状態を表わすので、情景描写文(益岡1987)であるとしている。

〈テアル〉の意味機能については、寺村秀夫1984では「眼前の状態を描写する場合」「現在の状況を述べる場合」とされているが、一方、益岡隆志1987では、「A型((対象)ガ～テアル(動作主は抑制される))」と「B型(動作主)ガ(対象)ヲ～テアル」の二つに分類している。しかし、意味の連続性と動作・行為の段階性と事象発生の順序性という観点から考えると、この二つの文型の順序は逆に並べるべきであると考えられる。

つまり、運動による結果として、能動表現における「主語+対象語+V+テアル」は第一の段階にあたり、動的状態自体は終結していて、それによる結果がもたらされており、静止したばかりの局面として想定され、動的状態が持続されているという段階にも辿りついていると考えられる(寺村秀夫1984における「現在の状況を述べる場合」と益岡隆志1987における「B型(動作主)ガ(対象)ヲ～テアル」に相当)。

それに対し、「場所語+対象語+ガ+V+テアル」は、完全に静止した状態が存在していることを描写することになり、第一の段階に続いて第二の段階に位置する結果として考えられる(寺村秀夫1984における「眼前の状態を描写する場合」と益岡隆志1987における「A型((対象)ガ～テアル(動作主は抑制される))」に相当)。このように、前者と後者は動的状態と静的状態を描写するという点では共通しているが、見える形で描写するかどうかという点では異なっている。二者は対立と統一の関係にあり、それぞれ違った局面を表わしている。世間の事象は互いに繋がっている部分もあると予想されるので、広い視野で観察する必要があるのではないかと思われる。

また、従来の研究では、「A型((対象)ガ～テアル)」という文型は視覚で捉えられる状態を表わすと説明されているが、実際には視覚的にも感覚的にも捉えることが

できると考えられる。この点については、杉村泰1996、中島1999にも記述がある。

このように、〈テアル〉は存在表現の場合、他動詞に接続することによって、その動的状態の意味を状態化し描写する機能を持っている。〈テアル〉は、静的状態の描写に用いられるので、ヲ格よりガ格の方が求められることになり、動的状態の結果としての存在を強調することになる。この点は、〈テイル〉と入れ替わることができない。それに対し、〈テイル〉は存在表現において格助詞の制限もあり、自動詞だけを対象とし、自然な存在の状態しか描写することができないと考えられる。

#### 4.2. 受動表現の場合

中国語の「着」は受動表現において、「挂(掛ける)」「贴(貼る)」などの動詞を捉えることができないので、運動の結果を表わす受動表現には用いることができない。それに対し、日本語の〈テイル〉は、受動表現において運動の結果を表現することもできるし、また、その結果の存在を描写することもできる。

- (9) ×墙上地图被挂着。(「壁に地図が掛けられている」の意)
- (10) 壁に地図が(??)を掛けられている。
- (11) ×黑板上字被写着。(「黑板に字が書かれている」の意)
- (12) 黑板に字が(??)を書かれている。

「挂(掛ける)」「贴(貼る)」などの動詞は、「围巾被挂到了衣架上(マフラーはハンガーに掛けられていた)」「门上被贴了一张纸(扉には一枚の紙が張られていた)」のように、「了」<sup>12)</sup>と共起して受動表現に用いることができるが、しかし、受動表現に用いられた場合は、「着」を用いることはできない。これには原因が二つあると考えられる。

その第一は、能動文の場合は、動作主は主語として、「(主語+場所語+V+着+目的語(往墙上挂着地图))」のように使われ、受動表現のマーカーとしての「被(～に～レル/ラレル)」の前に来るが、しかし、存在表現の場合は、場所語がその前に来るからである。

第二は、「被(～に～レル/ラレル)」の前に、対象語が来るべき位置に場所語が来ると、表現上の妥当性が問われるということである。この二つの原因で、「着」は存在表現における受動表現と共起することができないのである。なお、従来の研究では、「主語(名詞)+述語(動詞)」という構造は受動表現の一種とされているが、ただ受動表現のマーカーだけは使われないという説もある<sup>13)</sup>。

それに対し、〈テイル〉は受動表現において格助詞の支配を受けることがあるものの、存在の持続を表現することができる。この点は「着」と根本的に違ってい

る。

「場所語(ニ) + 対象語(ガ) + V + 受身助動詞 + テイル」という形式の受動表現は、動的状態を表わす場合も、静的状態を表現する場合も考えられる。たとえば、(10)の場合は、ヲ格を取れば、意図性と他動性が想定できるので、完全に動的状態を表わすと言えるが、しかし、ヲ格を排斥する傾向が見られる<sup>14)</sup>。一方、ガ格を取る場合は、動的状態の描写と静的状態の描写のいずれにも用いられる。たとえば、ある部屋に入ってみると、もし誰かによって地図が壁に掛けられている最中の場合は、動作主が明示されない動的状態を表わしていると考えられるが、もし掛けられている最中ではなく、もうすでにかけられたままでの状態で壁に地図が存在する場合は、静的状態を表わすので、存在表現と判断すべきであろう<sup>15)</sup>。よって、「場所語(ニ) + 対象語(ガ) + V + 受身形 + テイル」という受動表現は、存在表現としても用いることができると考えられる。

「壁に地図が掛けられている」と「壁に地図が掛かっている」の二つの表現を比べてみれば、「掛ける」と「掛かる」は互いに対応するペアとして、それぞれヲ格とガ格を取り、動的状態と静的状態を表わすものと見られる。「壁に地図が掛けられている」という表現は、前述の通り、動的状態の描写と静的状態の描写のいずれにも用いられるが、「掛ける」は他動詞であることもあり、受動表現に用いると、ヲ格ほどではないものの、他動性・意図性が意識されるから、完全に静的状態の描写に用いられると言い切れない側面があるものと考えられる。それに対し、「壁に地図が掛かっている」という表現は、自動詞としてガ格を取り、前者における他動性・意図性はまったく想定できないので、静的状態の存在を強調することができる。言い換えれば、「掛けられている」は動的状態も静的状態も表現することができるのに対し、「掛かっている」は静的状態しか表現することができない。

ガ格の場合、他動詞は受動形を取ると、自動詞相当の役割を果たすので、ヲ格の場合より客観性が強調されるようになる。ただし、それに対応する自動詞があるので、ガ格の場合でも完全に客観性を持っているとは言えない。一方、それに対応する自動詞は静的状態の存在を強調できるものの、受動形を取ることができず、動作主の存在も視野に入れることはない。ただ客観的に存在の状態を描写することになる。

一方、「書く」は無対他動詞として、対応する自動詞がないため、受動形を取ることにより、客観的な描写の機能を与えられ、「書かれる」の形で「掛ける・掛けられる」と同じような自動詞に相当する役割を果たすことができると考えられる。早津恵美子1990によれば、無対他動詞の受動形は有対他動詞の受動形より使用頻度が高い。有対他動詞の受動形があまり使われないのは、それに対応する自動詞があるからである。そして、

無対他動詞の受動形が多用されるのは、それに対応する自動詞がないからであると述べている。この見解は適切だと考えている<sup>16)</sup>。さらに説明すべきは、有対他動詞と無対他動詞はいずれも、運動の結果を表わす受動表現において、受動形を取ることにより、自動詞相当の役割を果たし、客観的な描写と発話者による客観的な捉え方を持つことになる。これは自動詞には有していない用法だと考えられる。他動詞による受動表現は評価の多様性と捉え方の客観性をもたらすことができる。

また、日本語の特色として、受動表現の場合は、客観性を有するので、存在の客観性が示唆され、能動表現の場合とは対照的であると考えられる。

中島孝幸1999では〈テアル〉〈ラレテイル〉の重なっている部分と重なっていない部分について述べている。それによると、「座っている彼のかたわらに、松葉杖が置いてあった」「電話機のそばには、メモ帖やら、番号簿やら、ボールペンやらが、雑然と置かれている」(P 47)のように、作用の加えられた対象(ガ格に立つ)が結果としてどのような状態にあるのか、作用の加え方、動作の様態を示すことによって述べられる場合は、重なる部分として認められるということである。しかし、〈テアル〉は作用の完結を表わすのに対し、〈ラレテイル〉は作用の完結と未完結のいずれも表わすと述べている<sup>17)</sup>。

ところが、「には」という格助詞 + 係助詞の構造が取られる場合は、〈ラレテイル〉は作用の完結を表わすから、存在表現を構成することになる。「場所語 + には」という表現は存在の場所を明示しているので、未完結の状態ではあり得ない。このように、「に」と「には」は異なっている。

このように受動表現においても存在表現が成り立つという点では、日本語は中国語と異なっている。

## 5. まとめ

存在表現では場所語が文の頭に来ることもあり、どこに何が存在するかという意味が強く、静的状態を表すという点では能動表現と異なっている。

中国語の「着」と日本語の〈テイル〉は、存在表現において、空間における事象の存在を表現し、描写性を持っているという点では、二語は大体共通しているが、しかし、受動表現にも用いることができ、空間範囲を表わす語句に依存するかどうかという点では、二語は異なっている。

「着」は存在表現に用いられる場合、空間範囲を表わす語句に助けを借りて静的状態の持続を表わすことになり、感覚的、視覚的に存在する事象を捉えることができる。しかし、受動表現には用いることができない。

〈テイル〉はそのままで事象の存在を描写することが

できる。受動表現においても存在表現の一翼を担う機能が付与されているが、ただ受動表現においては、動的状态なのか静的状態なのかははっきり規定されにくい一面がある。しかし、受動表現における存在表現の成立は存在表現の多様性が反映できるので、このことは日本語の表現の多様性に繋がるものと考えられる。

## 注

- 1)、本研究では中国語の考察語は「      」、日本語の考察語は〈      〉で示す。例文に挙げられた考察語については下線を引く。以下同じ。
- 2)、ここに挙げた作例の共起可否については、中国語は筆者の語感によるものであるが、日本語は日本人話者に実施したアンケート調査の結果によるものである。なお、参考のため、関連の作例に関するデータも取ったので、以下示しておく。参照されたい。
- 3)、考察語についての成果は多数あり、ここで一々取り上げる余裕がないので、本研究と関係のある文献だけを紹介する。また、参考文献として挙げられている論文も最小限に留めた。
- 4)、ここでは先行研究を振り返るため、ごく簡単に紹介する。関連の論文については具体的に考察する時に取り上げる。以下同じ。
- 5)、丸尾2007にも言及がない。また、氏は「他在墙上挂着一幅画(彼は壁に一枚絵を掛けている)」「他在书架上摆着很多书(彼は本棚にたくさん本を並べている)」を非文としている。詳しくは氏の論文(同P 120)を参照されたい。
- 6)、運動表現と存在表現の違いを理解するには、「挂/掛ける」「貼/貼る」のように運動と存在をいずれも表わすことのできる動詞を考察するのが最も効果的だと思われる。
- 7)、「站/立つ」「坐/座る」などの種類の動詞と存在表現との関係については別稿を予定している。参照されたい。
- 8)、従来の研究における二つの「着」があるという説はこの二つの用法に基づくと考えられる。ただし、「着」の動的状态から静的状態への切り替えの持続もできるという用法を有機的に考えれば、「着」は二つではなくて一つだという認識に至ると考えられる。
- 9)、A類とB類とC類における例文は多数のため、ここでは一々挙げるができない。
- 10)、日本の文法用語に場所語というのはないが、論述の便宜上、場所を表わす語句を場所語と呼ぶことにする。
- 11)、例文や例文の番号および下線は寺村秀夫1984をそのまま引用させていただく。
- 12)、「了」は文中のほか、「在黑板上写好了字(黑板に字が書いてある)」のように目的語の後にも来ることができる。さらに「在黑板上写好了字了(黑板にもう字を書いてあるよ)」のように「了」が文中にも文末にも来ることができる。
- 13)、刘月华1983はこの説を唱えている。詳しくは氏の論文を参照されたい。
- 14)、筆者によるアンケート調査の結果を参照されたい。
- 15)、中島1999では受動表現における動的状态の持続と静的状態の持続については完結と未完結という概念で区別されている。
- 16)、早津恵美子1990によれば、「掛ける」は「掛かる」という自動詞があるから、有対他動詞としてその受身表現の使用頻度が低い。一方、「書く」は無対他動詞として対応する自動

詞がないから、その受身表現の使用頻度が高いということである。

17)、例文は中島1999による。詳しくは氏の論文を参照されたい。

◎ここに挙げた日本語の例文がセンテンスとして成立するかどうかについて、日本人話者(年齢18歳~20歳、いずれも国立大学の在学学生である)にアンケート調査を実施して判定していただいた。

調査の基準は以下の通りである。日本語として非常に自然だと思うものは〈○〉、やや不自然な感じがするものは〈?〉、言わないことはないと思うものは〈?〉、日本語としては非常に不自然でほとんど言わないと思うものは〈?〉、日本人であれば、絶対誰も言わないと思うものは〈×〉で記入するように依頼した。以下それぞれその結果を示す。

- 1、壁に地図を掛けてある。  
[回答者51人：○7人 ? 11人 ??17人 ×16人]
- 2、もう壁に地図を掛けてある。  
[回答者51人：○32人 ? 9人 ??4人 ×6人]
- 3、壁に地図が掛けてある。  
[回答者31人：○28人 ? 3人 ??0人 ×0人]
- 4、壁に地図を掛けられている。  
[回答者31人：○3人 ? 4人 ??12人 ×12人]  
A、誰かによって地図を掛けられているところだ。[19人]  
B、もうすでに掛けられたままになっている。[7人]  
C、AとB両方の意味が取れる。[4人]
- 5、壁に地図が掛けられている。  
[回答者31人：○25人 ? 4人 ??1人 ×1人]  
A、誰かによって地図を掛けられているところだ。[2人]。  
B、もうすでに掛けられたままになっている。[17人]  
C、AとB両方の意味が取れる。[11人]
- 6、もう壁に地図を掛けられてある。  
[回答者51人：○2人 ? 7人 ??14人 ×28人]
- 7、もう壁に地図が掛けられてある。  
[回答者51人：○30人 ? 8人 ??6人 ×7人]
- 8、もう壁に地図を掛けられてある。  
[回答者51人：○2人 ? 7人 ??14人 ×28人]
- 9、もう壁に地図が掛けられてある。  
[回答者51人：○30人 ? 8人 ??6人 ×7人]
- 10、壁に地図が掛けてあつておく。  
[回答者51人：○1人 ? 0人 ??1人 ×49人]
- 11、壁に地図を掛けておいてある。  
[回答者51人：○14人 ? 13人 ??13人 ×11人]
- 12、壁に地図を掛けてあつておく。

- [回答者51人：○1人 ? 0人 ??1人 ×49人]  
 13、地図がもうA氏によって壁に掛けられている。  
 [回答者37人：○18人 ? 8人 ??5人 ×6人]  
 14、地図はもうA氏によって壁に掛けられている。  
 [回答者37人：○18人 ? 15人 ??3人 ×1人]  
 15、地図はA氏によって壁に掛けられている。  
 [回答者37人：○26人 ? 7人 ??3人 ×1人]  
 16、地図はもう壁に掛けられている。  
 [回答者37人：○32人 ? 4人 ??1人 ×0人]  
 17、壁に地図を掛けておいた。  
 [回答者51人：○44人 ? 5人 ??2人 ×0人]  
 18、黒板に字を書いている。  
 [回答者51人：○6人 ? 9人 ??13人 ×23人]  
 19、もう黒板に字を書いている。  
 [回答者51人：○17人 ? 18人 ??7人 ×9人]  
 20、黒板に字が書いている。  
 [回答者31人：○30人 ? 1人 ??0人 ×0人]  
 21、黒板に字が書かれている。  
 [回答者31人：○2人 ? 8人 ??12人 ×9人]  
 A、誰かによって字が書かれているところだ。[17人]  
 B、もうすでに書かれたままになっている。[11人]  
 C、AとB両方の意味が取れる。[2人]  
 22、黒板に字が書かれている。  
 [回答者31人：○29人 ? 1人 ??1人 ×0人]  
 23、もう黒板に字が書かれている。  
 [回答者51人：○2人 ? 3人 ??17人 ×29人]  
 24、もう黒板に字が書かれている。  
 [回答者51人：○23人 ? 13人 ??6人 ×9人]  
 25、黒板に字を書いている。  
 [回答者51人：○7人 ? 13人 ??14人 ×17人]  
 26、黒板に字が書いてあっておく。  
 [回答者51人：○0人 ? 1人 ??1人 ×49人]  
 27、黒板に字を書いている。  
 [回答者51人：○1人 ? 1人 ??1人 ×48人]  
 28、A氏はもう黒板に字を書いている。  
 [回答者37人：○4人 ? 14人 ??9人 ×10人]  
 29、A氏はもう黒板に字を書いている。  
 [回答者37人：○7人 ? 15人 ??10人 ×5人]  
 30、字がもうA氏によって黒板に書かれている。  
 [回答者37人：○15人 ? 13人 ??6人 ×3人]  
 31、字はもうA氏によって黒板に書かれている。  
 [回答者37人：○17人 ? 14人 ??5人 ×1人]  
 32、字はA氏によって黒板に書かれている。  
 [回答者37人：○28人 ? 6人 ??3人 ×0人]  
 33、字はもう黒板に書かれている。  
 [回答者37人：○34人 ? 2人 ??1人 ×0人]  
 34、黒板に字を書いている。  
 [回答者51人：○38人 ? 10人 ??3人 ×0人]

- 35、宝くじの売り場に沢山の人形が並べてある。  
 [回答者29人：○29人 ? 0人 ??0人 ×0人]  
 36、宝くじの売り場に沢山の人形を並べてある。  
 [回答者29人：○10人 ? 10人 ??7人 ×2人]  
 37、宝くじの売り場に沢山の人形を並べられている。  
 [回答者29人：○1人 ? 5人 ??6人 ×17人]  
 38、宝くじの売り場に沢山の人形が並んでいる。  
 [回答者29人：○25人 ? 1人 ??2人 ×1人]  
 39、宝くじの売り場に沢山の人形が並べられている。  
 [回答者29人：○20人 ? 5人 ??3人 ×1人]  
 40、宝くじの売り場に沢山の人形が並べられている。  
 [回答者29人：○11人 ? 12人 ??4人 ×2人]

## 参考文献

- 中国語  
 中国語北京大学中文系1955・1957級語言班編1982《現代漢語虛詞例釋》商務印書館  
 戴耀晶1994「現代漢語持續體“着”的語義分析」邵敬敏主編《九十年代的語法思考》北京語言學院出版社  
 費春元1992「說“着”」《語文研究》第二期  
 高橋彌守彦2007「動態助詞“～着”の用法について」『大東文化大學紀要』第45号〈人文科學〉  
 菅谷有子1996「[V-テイル]に対応する中国語アスペクト」『小出記念日本語教育研究會論文集アーガイド』No. 5  
 李臨定1986《現代漢語句型》商務印書館  
 劉一之2001《北京話中的“着”(zhe)字新探》北京大學出版社  
 呂叔湘主編1984《現代漢語八百詞》商務印書館  
 石毓智2006「論漢語的進行體範疇」《漢語學習》第三期  
 王學群2007「中國語の“V着”に関する研究」白帝社  
 吳卸耀2006《現代漢語存現句》學林出版社  
 張黎2012《漢語意合語法研究—基於認知類型和語言邏輯的建構》白帝社
- 日本語  
 飯嶋美知子2004「結果繼續表現の日中対照研究—「他動詞の受身+テイル」と中国語の存在分、受身文—」『早稲田大學日本語教育研究』4号  
 奥田靖雄1977「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『宮城教育大學國語國文』8号  
 江田すみれ2013「『ている』『ていた』『ていない』のアスペクト」くろしお出版  
 金田一春彦1950「國語動詞の一分類」金田一春彦編1976『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房  
 工藤真由美1995「アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—」ひつじ書房  
 斎藤茂2012「現代日本語のテアル構文の研究内容の要旨」『言語と文明』10麗澤大學大学院言語教育研究科  
 杉村泰1996「テアル構文の意味分析—その「意図性」の観点から—」『名古屋大學人文・科學研究』第25号  
 寺村秀夫1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版  
 中島孝幸1999「結果を表す構文について：テイルとラレテイル」『三重大大學日本語學文學』10号



- 仁田義雄1982「動詞の意味と構文—テンス・アスペクトをめぐって—」『日本語学』1巻2号
- 原沢伊都夫2002「理論と実践の結びつき：テアルの表現形式から」『静岡大学留学生センター紀要』1号
- 藤井 正1976「『動詞+ている』の意味」金田一春彦編1976『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 益岡隆志1987『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 吉川武時1976「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編1976『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 吉川妙子2012『日本語動詞テ形のアスペクト』晃洋書房
- 李 京保2007「～テアル文の構造及び意味用法」『日本研究教育年報』11号東京外国語大学

## 謝辞

本研究は日中対照言語学会月例会において口頭発表した原稿をもとに加筆修正したものである。この場を借りて、司会の先生をはじめ当日会場内で発言された諸先生にお礼を申し上げる。本研究の日本語の表現については、愛媛大学元教授の菊川國夫先生にご指導を賜わった。末筆ながら、感謝の意を表したい。

(2014年9月24日受理)